

山びこ通信

学校法人 北白川学園

山の学校

LVDVS COLLINVS

しぜん₂ イタリア語₁₂ ラテン語₁₄ ウェブプログラミング ロシア語₁₃
歴史 ギリシャ語₁₅ かが₃ ユークリッド幾何₁₀ フランス語₁₃ 数学₈
ことば₄₋₆ つくる₄ 漢文 かず₆₋₈ ドイツ語 イベント 将棋道場₁₆ 英語₉
ロボット工作₁₁ 山の学校ゼミ(社会₁₁/数学₁₀/調査研究₅/法律/経済₁₂/生活と文化/倫理₅)

大人の言葉、子どもの心

——思い出を力に変えて 山の学校代表 山下太郎

山の学校では『論語』の素読を担当しています。子どもたちと接していると、当時の何が今の自分の心に残っているのかと考えます。そうすることで、子どもたちに接する自分の心や言葉が整えられる気持ちになるからです。

小学二年生の時、鴨川にクラスで遠足に出掛けたことがありました。皆好きな場所で遊ぶのですが、私は岸边でぼんやりと対岸を眺めておりました。すると担任の先生がそばに来られ、「この川の幅は何メートルあると思う？」と問われました。キョトンとしていると、地面に三角形の絵を描いて、これこれしかじかで何メートルくらいかはわかる、と言われました。もちろんその説明の意味はわかりませんでした。今自分は何かとても大切なことを教わっているのだ、というあらたまった気持ちになりました。そのときの先生の力強い指の動きは今も蘇ります。

その後中学に上がり、数学の時間に幾何学を学ぶようになると、「あれはこれだったのだ」と合点し、一人でどんどん問題に挑戦するようになりました。時間はどれだけかかってもいい、回り道をしてもいい、正しい道を歩み続ける限り必ず問題は証明できる、という確信が当時の私を奮い立たせました。その結果、何がどうなったのかと問われると答えに窮しますが、後々幾何学の母体たるギリシャ・ローマ文化に惹かれるようになったのは、このときの経験が一役買ったように思います。

と、このようなことを書きながら、私は「思い出は力になる」という自分の信念をここで強調したいのですが、だからといって、子どもが将来大人になったとき、どのような言葉がどのような思い出に結晶するのかと問われても、具体的なお返事をすることはでき

ません。人生は一度きりであり、一つとして同じ人生はないからです。頼りない話のようですが、それが事実です。ただ、そう認識することで、少なくとも大人が子どもに自分の価値観を押しつける愚は回避できるように思います。

もちろん、子どもは大人の助力なしに大人への道を歩めませんので、何らかの導きは必ず必要になります。そのとき、大人は子どもに何を語るべきでしょうか。私の例をふりかえるとき、先生は私を数学者にしようと思ったはずはありません。ただ、この知識はこの子の「何か」につながるに違いない、と信じる気持ちがあったことは十分想像できます。私はそのことに対して、今も感謝します。次世代に何かを伝え、残したい、といった教育の原点にある気持ちが先生の心にはありました。それが大人になった今、私にははっきりと伝わってきます。

私にとって、教育とはそういう意味での「思い出の種まき」です。心を込め、祈る気持ちをもって行わなければなりません。月に一度の『論語』の素読の時間は私にとって貴重なひとときです。大人の言葉で書かれた孔子の考えを、いかにかみ砕いて子どもたちに伝えるか。考えるだけでも難しい課題ですが、目の前にずらっと並んだ子どもたちの目を見ていると、言葉は自然と湧いて出てきます。子どもたちに問いを出すと、様々な発想で答えが返るので、同じ言葉を取り上げても、私の解説はいつも違うものになるのが面白いのです。

次世代に何を伝え、残すのか。この問題に対する答えは人によって様々ですが、私は、今まででも、そしてこれからも、「古典」と「対話」を大切にしていきたいと思います。



A(火曜)クラス ひみつの森を抜け、ルートに皆で相談しながら決め、山奥の行けるところまでを目指し、帰りは落ち葉の積もった斜面をウォータースライダーのように滑り降りながら、行きの3分の1くらいの速さで駆けて帰ってくる。いつしかそれが、クラスの定番となっていました。

春学期終盤のある日も、険しい斜面をよじ登りながら、茶山に着いて、一休み。そのもう少し先にある、秘密の絶景ポイントで一休み。そしてこの日のゴールは事前に決めていませんでしたが、「清沢口石切場」となりました。1年生S君も、回を重ねるごとに、上の学年の仲間たちに遅れを取らず着いていけるようになっていくのを感じますし、いつも先頭をきって進む中学年の仲間も無茶をせず、後ろの気配を感じ取りながら進んでくれるようになりました。その、最後尾と先頭集団の真ん中あたりの位置をいつもさりげなく保っているのは、我々が隊長6年生のH君です。みんなの成長と、そこはかたない力を、頼もしく思います。また、森の奥の尾根道が続く手前のエリアで、全力の「鬼ごっこ」、「かくれんぼ」、「けたた(ぼこべん)」などをする日もありました。有り余る程の元気を解放し、教室に戻る頃にはみんなどこか穏やかです。

秋学期最初のクラス。「久しぶりに沢へ行ってみたいなあ。」という声が上がります。いつものように出かけます。向かう途中、石段の側溝に水の流れているのを見つけ、一人が立ち止まって手のひらで水を塞ぎ止める遊びをしはじめたので、「どうせなら、沢へ行ってやってみようよ」と提案すると、「そうだ!」「やろうやろう!」と言ってみんなが駆け出しました。「しめた」と心に呟く瞬間です(笑)。

呼び名の通り、いつ来てもしっとり澄んだ空気に満ちている清沢。蛇行する細い流れは、場所によって緩急も深さも異なります。各々が適当な場所を見つけると、近くにある大小の石を積み上げて、ダムを作り始めました。当たり前なのですが、流れは尽きることがありませんし、どんなに石を積んだところで、流れは「ダム」を飛び越え、隙間を溜り抜けて流れていきます。しかし、頑張って石を組むことで、ある程度水を溜めることができ、何か「やったぞ!」という実感が湧きます。無心に石に目を凝らす時間。流れに挑む時間でした。



B(木曜)クラス このクラスでは、自分たちが森のなかで拾ってきた材料を中心に、思い思いの工作を楽しんでいます。

まずは男の子たち。To君とY君は将棋盤と駒のセットをつくらうとしています。輪切りにした木の枝を、盤の足にすべく、釘で留めますが、釘打ちも慣れないうちは難しいようで、苦戦します。ようやく打ち付けた足でしたが、盤面に釘頭が出るし、グラグラするというので、次のクラスで釘を全部抜き、ホットボンドで圧着することにしました。

M君も、自分の大好きな「サンダーバード1号」のロケットを木でつくらうとしています。二本の別々の枝を1つに繋ぐ、一見簡単なような行程ですが、両方の断面にドリルで穴を開け、細い枝を挿して「ホゾ」の要領で繋いでいます。彼自身が考えた方法です。ロケットが完成すると、彼も将棋盤を手伝います。



将棋の駒は、細めの枝をひたすら輪切りにして作ろうと思いついたのですが、実際の駒のように薄く切るとはなかなか難しく、3、4センチくらいに立ち上がった、チェスの駒のような格好です。でも、並べてみると、それはそれで面白い!ということで、万力に固定した枝をずらしては切る、を繰り返します。駒を切り出す人、盤面に線を引く人、駒に文字を書く人。将棋セットは3人の華麗なチームプレイによって、完成まであと一歩です。

一方の女の子チーム。腰掛けられるくらいの丸太を使って、「鹿」を作ることをSちゃんが思いつけば、Mちゃんも一緒になって手伝い、Mちゃんが「ドールハウス」づくりを始めると、Sちゃんも一緒になって作るといった様子です。

鹿の首から頭部は、先がY字に枝分かれした、やや反った丸太がぴったりでした。そこに、目や鼻をホットボンドで接着し、「角」をつけると、随分姿がみえてきました。また、胴体になる杉の丸太の皮を削ると、すべすべふわふわした質感になることを発見し、二人とも夢中で削っていました。これから、首と胴体を繋げたり、足をつけて立たせたり、難所が待ち構えています。今は二人とも、ドールハウスづくりに夢中です。ベンチに机、縄梯子に屋根裏部屋・・・。表札には、二人の名前が仲良く描き込まれています。

どんなものが作れるか、どんな方法があるか。答えを一緒に導き出しながら、決して慌てずに、没頭する時間を皆さんと過ごしていきたいと思います。



秋学期は、今それぞれの胸の中にある「描きたいもの」を自由に描くことから始めました。探求したい表現方法や画材は生徒が自分で選びます。

また、制作の手がかりとして、『みえないもの』をどのように描けるか」という問を投げかけ、みんなと対話をしながら「みえないもの」について考え、色や形のイメージを膨らませる時間も過ごしています。

空気や風、人の気持ち、ものごとの様子、音楽、匂い、感覚……。『みえないもの』に目を凝らし、子どもたちが次々と作品を描く傍らで、私も描きます。描けたら、今度は周りの友達や私と一緒に作品を振り返ります。「こういう感じがするなあ。どう？」尋ねると、うんうんと頷き、説明してくれる場合もあれば、にっこりしながら沈黙している場合もあります。「題名は・・・?」「・・・」「内緒にしておく?」「うん、ナイショ!」そんな風にして次々に大小の画用紙が絵の具や色鉛筆やパステルで彩られて行きました。

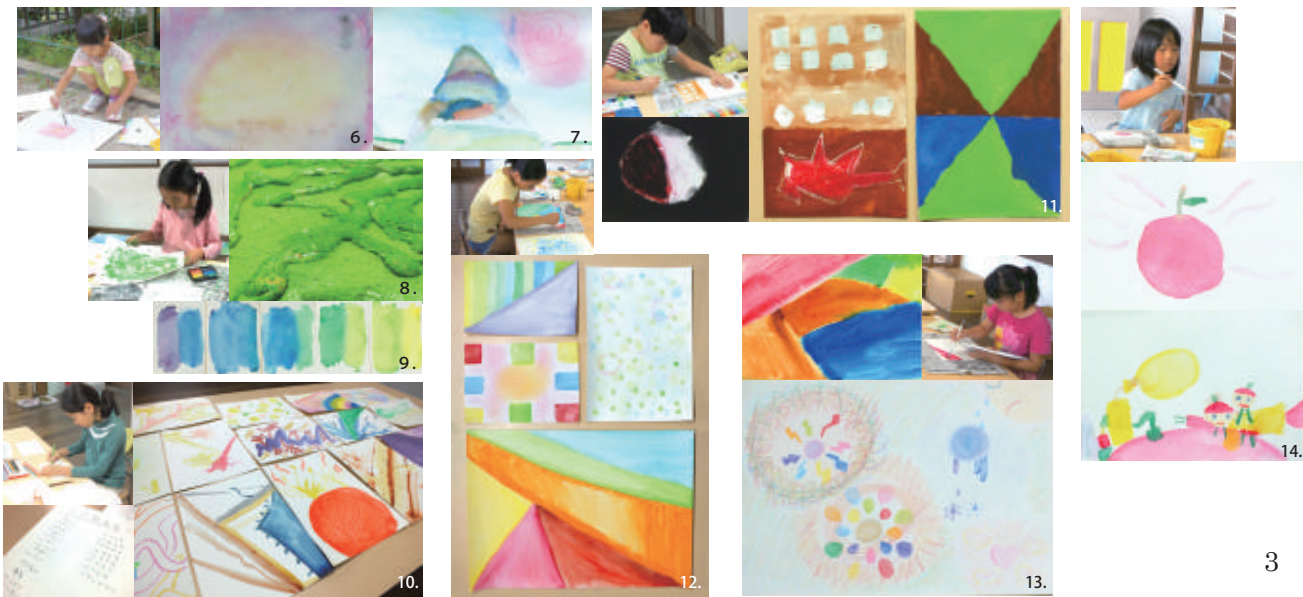
この課題が終わったら、今度は粘度で立体造形を試みようとして、みんなで決めているのですが、今過ごしている時間が生かされればと期待しています。見ることで、あらわすことには、どこまでも奥行きと広がりがあります。そんな当たり前のことが許されている、自由な実験と探求の場を、これからも守っていくつもりです。

A(火曜)クラス 各自が課題を設定して取り組んでいます。春学期には一本のカラタチの木から幻想的な風景を描いてくれたH君。今回、自動筆記に近い感じで不思議な模様を描いています(1,2)。Sちゃんも、事物を目に焼き付けた後、心の目で再構築します(3)。次に取り組んでいるのは貼り絵。下絵を描き、色紙を貼り付ける際に使う型紙パーツまで作成。色紙は、絵の具やマブリングによって自作します。数年前にした課題を思い出して、製作工程も全て自分でおさらいしてから取り組んでいます(4)。「船の絵を描く!」とK君。何も見ずに豪華客船「しらすぎ号」を描き、「ここが客室で、ここがビュッフェでね…」と細かに説明してくれます。家族で旅をするのが夢なのです(5上)。作者自身が会心の出来と言う通り、その豪華客船に魅了されたS君は、彼の絵をそっくり見本にして描きました。よくみるとアレンジされています(5下)。こうした学び合いを嬉しく思います。



B(木曜)クラス 春学期の課題「外で描こう」の流れで、外で描くのもよいです。Aちゃんが、ずっと園庭のクスノキを見ながら描いていた作品。オーラのようなものが見えたのでしようか(6)。こちらはタイトル未知ですが、山でしょうか(7)。同じく外で描くことの多いFちゃん。この日は何枚もグラデーションの作品を描き(9)、その後パステルの実験。丸一本分を粉にして画用紙に振りかけます。しかし、ハードパステルの場合は擦ることで定着が可能ですが、どうしても粉が降り積もったままの感じがよかった彼女。あらゆる画材が簡単に言えば「顔料+接着剤」で出来ていることを説明すると、粉の上からボンドをふりかけ、さらに粉を振りかけました(8)。幼稚園時代の彼女が、自分で混色した空色で、画用紙20枚余りを隙間なく塗り潰したことや、拾い集めた枯れ葉の山に、木工用ボンドを振りかけていたことを思い出します。Yちゃんは、ハガキ大の紙を次々と彩って

いきます。言葉を列挙した「人の気持ちノート」「ようすノート」というものを自ら作り、参考にしています(10)。M君、色選びも塗り分け方もこだわりが見られ、何とも言えない意味深長な形象です。昨夜見たという「月食」の絵も(11)。大小の画用紙を思いのままに埋めていくIちゃん。今年でクラス6日目。少しシャイな一面もある彼女ですが、真剣な眼差しと迷わぬ筆運びに変わらず圧倒されます。どんな気持ちを表してくれたのでしょうか(12)。Rちゃんも、画用紙を色々な色で塗り分けて「何か」を表しています。色鉛筆で描いた作品には、人の色々な気持ちが同時に描かれていて、こぼれ落ちた涙がととても印象的です(13)。小人たちがりんごに群がって何か採取しているようです。なるほど、「香り」や「味」も目に見えないものですね。(そしてまた、小人もなかなか会うことができないものですね!)(14)



『つくる』(A・B)

担当 福西亮馬

A・B クラスとも、作ることが大好きな生徒に恵まれ、否、恵まれすぎるぐらいに、この二つのクラスは、生徒たちの意欲の大きさに支えられています。それに答えることが私の仕事です。そして、生徒たちがめいめい何がしかの達成感を持って(また大きな野望を胸に秘めて)、山の下へと帰っていく様子を見送ることができた時に、「ああ、今日もクラスができてよかった」と思います。

A クラスでは、前学期にした『がらくた工作』を「またやりたい!」という生徒のリクエストに応じて、まずそれを展開しました。また、『ひねもす』が好きな生徒にも応えて、ひねもすでロボットを作りました。最近では、ダンボールでカタパルトを作って、公園にペーパークラフトのミニ飛行機を飛ばしにも行きました。それぞれに夢中になってくれる様子が、とても眩しいです。

B クラスでは、夏休みの電子工作のイベントにあったドア・センサーを改良して、『的当てゲーム』を作りました。LMC555 という有名なタイマー回路(電子部品)を使って、一定時間スピーカーを鳴らすものです。次はモーターで動くものを作る予定です。以前一度、前進・後退のできるクローラーを組み立てました。今度は、念願の方向転換もできるものを作しましょう。時折、低学年の生徒たちが、「何作ってるの?」とクラスを覗きに来ることがあるのですが、そんな時、高学年の二人は優しくニコツとしながら、黙々と作業を続けています。まるでマイスターの工房のように感じます。

以下、百聞は一見に如かずです。ぜひ写真でご覧ください。



『ことば』(1~2年 A・B)

担当 福西亮馬

『保持する力』

A クラスでは、和歌と俳句を暗唱しています。この原稿を書いている頃には、春学期にしたものと合わせてちょうど10首と2句をしたことになります。秋学期から新しく参入した生徒の二人も元気で、「ぼく(たち)、国語好き!」と言ってくれています。自発的に絵や作文を書いてきてくれたりと、毎回、何かで驚かされることがあります。

秋は月の句をテーマにしました。大江千里「月見れば」、安倍仲麿「天の原」。いずれも友とするにふさわしい名歌です。きっと忘れていただろうと思いながら復習を呼びかけた時、これ以上ないほどの張りのある声で発してくれた時がありました。その時、私は生徒たちの保持する力にびっくりしました。「いつ憶えた(憶え直した)の?」と思わず言ってしまうと、生徒たちは、余裕そうなしたり顔を見せてくれました。

575 や、57577 のリズムについても、すぐに覚えてくれました。それをすでに知っている生徒は、今で

はより自分の物としてくれています。字余りについて、また「ゃゅよ」は数えずに「っ」は1字使うなどのルールを「これはこう？」と確認してくれる時、また、それを踏まえた上で「崩しても良いよ」と伝える時、何気ないことですが、それを嬉しいと感じます。

このクラスでは、俳句作りの紙を渡すと、句会になる日がありました。好きなもの、嫌いなもの、学校であったこと、お父さんに教えてもらったこと、お母さんと発見したことなどを題材に、行間から溢れる「これはこういうつもり」「こういう意味」ということをつぶさに教えてもらいました。一句書き上げるとに筆が乗る生徒、昔風の言い回しに興味が出てきている生徒、好きなもののことを慈しみを込めて一途に書き表す生徒、前向きなことを書こうとしてうんと腕組みをしている生徒、いわゆる文字にすることを通して自己を研鑽している生徒。それぞれの俳句の中から、その時のさまざまな様子が見えてきます。生徒たちの心の在り様そのものを、今しかない川面の光具合だと思い、称揚したいと思っています。

本読みでは、これまで一話完結の昔話をしてきました。今学期からは、少し長めの物語にも挑戦したくなってきたので、センダックの『ケニーのまど』（神宮輝夫訳、富山房）を読み始めています。

B クラスでは、『孫子』から主に取り上げた8つの章句を暗唱しました。その『孫子』の九地篇第十一の五に、「よく兵を用うる者は、たとえば卒然の如し」「卒然とは常山の蛇なり」という言葉が出てきます。中国の伝説の蛇ですが、頭の部分からやっつけようとする、尾の方の返り討ちに遭い、尾を打てば首が襲ってくる。そして真ん中を突くと、「首尾ともに至る」とあります。首(しゅ)は「あたま」のことで、尾(び)は「おっぱ」と言うのと分かりやすかったようです。それを合わせて「首尾」という言葉になります。怪物話は、このクラスでは好んでしてきたものですが、この日も、いろいろと想像が湧きました。

そこから、折しも台風が近付いていたこともあって、ヤマタノオロチとササノオの素話をしました。大蛇の首のすべてを酒で酔わせるくだりでは、生徒たちは春学期にした酒呑童子のことをよく憶えてくれていました。そして「もっとこうすればいい！」と、大蛇退治のアイデアを次々と出してくれていました。また、同じ蛇つながりで、ヘーラクレースのヒュドラー退治も話しました。

次に、天の岩戸の連想を借りて、『太陽へとぶ矢』（J. マクダーモット、神宮輝夫訳、ほるぷ社）の絵本を読みました。これは太陽の神様の息子が、自分の父親である太陽に会いに行くお話です。四つの試練を受けるあたりが、男の子たちをワクワクさせたようです。それから、工作好きな生徒たちの興味に応じて、クレタ島の迷宮を作ったダイダロス、またイーカロスの翼の話をしました。この稿がお手元に届く頃には、テーセウスのミーノートウロス退治の話と、アリアドネーの糸の機知を話していることでしょう。

このクラスでは、『孫子』はひとまずここでしめくくりとし、次回からは、孔子や老子の言葉を紹介していきます。

A、B クラスとも、どちらも多様な顔ぶれに恵まれ、彼らに授業の内容を引き出されています。またこの頃は、以前話したことが返ってくるなど、彼らの保持する力に、日々目を瞠っています。

『ことば』（3～4年）『山の学校ゼミ（倫理）』

『山の学校ゼミ（調査研究）』

担当 浅野直樹

知識や情報などを仕入れて、今度は自分で表現するという活動をしています。

今学期から新しく倫理クラスが開講されました。調査研究クラスなどで自分の考えを表現するために必要だという動機で問い合わせをいただき、実現したという次第です。このような経緯から、倫理クラスでは教科書の太字の語句を覚えるといったことはせず、聖書やギリシア神話などをじっくり味わいつつ、神の性質や現代における位置づけなどを話し合っています。そして調査研究クラスでは学期末に発表をすることを目指して原稿を作成しています。

ことば3～4年クラスでは推理小説を自分たちで作るという大きな目標を掲げました。山の学校には

先輩たちが作った作品が置いてあり、それらに刺激を受けてのことです。いきなり推理小説を作るのは難しいだろうと思ってまずは既存のいろいろな作品を読もうとしたのですが、少し読んだだけで、もういいから作り始めると言われました。この原稿を執筆している時点では登場人物や暗号を考えているところです。

『ことば』（5～6年）

担当 梁川 健哲

秋学期からは、6年生の二人と過ごしています。

小学校の放課後に、このお山の上に上がってくる二人とは、まず世間話から始まります。大抵は小学校での話題が多いですが、季節柄「駅伝大会」や「運動会の組体操」の練習などで、少々疲れ気味の日も見られました。そうしたときは肩の力を抜いて、そのまま喋り続ける日もありました。

ある日は、互いの好きなことの話から、スポーツ観戦に話が及んだり、妖怪の話になったり、語らうことそのものの話になったり、そこから、「心をひらく」とはどういうことだろう、「人の気持ちになって考えよう」とはよく言うけど、どうということだろう・・・などという話になり、語らうだけでクラスが終わったこともあります。

また、雨のしとしと降る別の日には、前学期から輪読を続けている長編小説『光車よ、まわれ！』（天沢退二郎）を一章分読み切って一時間が経ってしまったこともあります。主人公は、生徒と同じ小学6年生。あるとき学校で起こった同級生の異変をきっかけに、「あやかし」の存在に気付いてしまった数人の仲間たちが力を合わせ、「水の悪魔」に対抗するために必要な「光車」と呼ばれる不思議な車輪を探し始めます。私たちに身近な「水」が、奇妙な振る舞いをしたり、水面を通して「さかさまの世界」に迷い込んでしまったり、日常がいつのまにか非日常的世界に繋がってしまうドキドキ感があります。

また、風の吹く爽やかなある日には、園庭のベンチにこしかけて、「お花だったら」、「芝草」、「お日さん雨さん」など、身近な自然について綴った金子みすゞの詩を味わいました。

「ほこりのついた しば草を 雨さんあらって くれました。 あらってぬれた しば草を お日さんほして くれました。 こうしてわたしが ねころんで 空をみるのに よいように。」

どれも七五調のリズムが心地よい詩なので、俳句に馴染みのある二人にとって、詩作に繋がるきっかけになればという気持ちもありました。そして詩の一節にあったように、三人で芝生の築山に寝転がってみました。実際、雨上がりの、微かにしっとりとした芝草でした。（その時間が数十秒であったのか、数分であったのか、私が声をかけなければ、三人ともそのままずっと寝転んでいられたかもしれません。或はそうであってもよかったのかもしれない、と今では少し思います。）そのまま芝生の上で体を起こし、今度は極端に趣の異なる、北園克衛の言葉を羅列したような風変わりな詩を紹介しました。残り時間はうろうろしながら俳句や詩のネタを探しまわったりしました。

俳句にせよ、ディスカッションにせよ、すらすら言葉が出てくる日も、そうでない日もあります。私もそうです。答えが出ないような問いに直面すると、しばらく沈黙が流れます。しかしそうした最中も二人の眼差しを見ると、頭の中に何か言葉にならない言葉が渦巻いているのを感じます。冒頭で触れましたが、例えば「人の気持ちになって考える」とはどういうことでしょうか。スパイスとして、皮肉たっぷりの老人が青年と対話する『人間とは何か』（マーク・トウェイン著）あたりを敢えて引きながら、今度一緒に考えてみたいと思っています。

『かず』（1～2年 A・B）

担当 福西亮馬

A、Bクラスとも、『まちがいさがし』と『迷路』をよくしています。また最近では、定番の『足し算パズル』も、慣れた人から順に3マスから4マスへと変わり、手ごたえ・歯ごたえを増やしています。パズルの詳細はここでは割愛し、山の学校のブログの方に書くつもりですが、『ビルに見えるパズル』や『桂馬跳びの

パズル』など、新手的レパトリーも少しずつ増やしていく予定です。毎週ごとに用意した課題はあっという間に底が尽きてしまい、丸付けが追いつかないぐらいです。プリントを綴じているファイルもかなり分厚くなってきたこの頃です。

1～2年生を見ていると、解けた時の喜びようは、それはたいそう、すごいものがあります。『まちがいさがし』で誰もまだ見つけていない箇所を自分で見つけた時など、両腕で答案を覆い隠しながら、あたかも企業秘密のように、そっと私のところまで見せに来ます。「ここは何が違いますか？」(ひそひそ声)「こっちは絵は～があるけど、こっちにはそれがない!」「正解!」「やったー!!」(大声で)と、そのような調子で、いい意味での繰り返しがあります。粘り強く、「なせばなる」ということが体験できるのも、算数ならではの特徴です。ただし何事も最初から一足跳びにというわけには行きません。時には時間を区切ってヒントを出す必要もあると感じます。ただしすぐにそれを要求する生徒たちには、少し踏ん張ってもらい、その時間を少しずつ伸ばしていけるように配慮しています。それぞれの階段にある、それぞれの一步を大事に見ています。

一方、『考えて解く迷路』になると、大人でも十分に頭を使うものがいくつもあります。そのような(見た目以上の)難問に挑戦する生徒たちの顔を見ていると、最初は意気揚々でも、正解にたどり着くまでの間、何度も葛藤を経ているようです。それで、さっきまでの顔から一転して、「できた」と言うのを見ることほど、驚くことはありません。それは純粹に、大人だからや子供だからという理由を抜きにして、それまでの潜考に対して敬意を覚える瞬間です。

『かず』(5～6年)

担当 福西亮馬

復習範囲のドリルをしています。春学期に1年生の文章題から始め、今ではだいたい3年生のところまで来ました。それと並行してこのクラスでは、日本地図を広げて、50マイルたったら1県取れるというようにしています。ドリル1ページにつき1マイルです。(味付けが濃くならないように、それ以上のルールは追加しないようにしています)。大河ドラマでちょうど黒田官兵衛をしているせいか、戦国時代に楽しい印象を持っている生徒が多いようなので、一つの励みになればと思います。

授業の合間に、旧国名の話をするがありました。「播磨と但馬と淡路を合わせた国が今の兵庫で、長野はだいたい信濃で、岐阜は美濃と木曾で…」と言い、それぞれの石高のことや、その石高からおおよその兵力が計算できるといった話もしました。すると、「(石高の)多い国ってどれ?」「そっか。滋賀県(近江)は琵琶湖があるからか」「78万石って、どれぐらい兵力が雇えるの?」と、素朴な疑問を投げかけてくれました。1万石がだいたい250人だと言われているので、ここで $78 \times 250 = 78 \div 4 \times 1000 = 19500$ と、算数の問題を拾うこともできます。

もちろんこれだけでは算数の力つきませんが、もしどれかの科目で「好き」という印象が育っているのだとしたら、それを他の科目ともお互いに重ね張りしておくことは、得なことだと思います。二つ以上のやる気の源を持っておくと、仮に一つが奮わない時でも、もう一つが補助に入ってくれます。「あれのようにこれも」というわけです。

ドリル以外の取り組みでは、ある時には、さいころ(正六面体)を作る11種類の展開図をすべて見つけるということをしました。宝探しみたいに盛り上がりました。またある時には、『algo』や『モノポリー』をしました。もちろんこれも生徒たちに「考えること自体」が好きになってもらうための取り組みです。考えること自体が好きであれば、ドリルでも後押しが期待できます。それを重ね張りできることを目的にしています。

算数で起こるエラーの原因には、およそ三パターンあるように考えています。一つは、算数自体に対する「ネガティブな印象」(自己暗示)。一つは、設問の意味を取り違えていたり計算間違いといった「勘違い」。そしてもう一つは、学習時期での「記憶違い」です。

一つ目は算数の根っこです。そこで算数という外見を取り外したところにある、中身の「考えること」自体が楽しいと思ってもらえるように、先の『algo』のようなものを用意しています。二つ目の「勘違い」

に対しては、たとえば『まちがいさがし』を通して、独力で自分の間違いに気付く粘り強さを称揚しています。そして三つ目の「記憶違い」については、独力では修正できない部分なので、一緒に正しい方法を学び直します。その部分を見つけるためにドリルをしています。かずのクラスでは、だいたいこの三つの段階を取っています。

『かず』（3～4年）『中学数学 B』『高校数学』

担当 浅野直樹

この8月には「勉強とは何か？」トークイベントを開催しました。その準備として勉強法に関する本をまとめて読みました。その過程で考えたことをここに記します。

数学にはひらめきのようにセンスを問われる部分があれば、地道な努力を重ねて練習すればできるようになる作業的な部分もあると考えるのがよいと感じました。

「私には数学のセンスがないから勉強しても意味がない」といった言葉がしばしば聞かれますが、数学的センスを養うことができるかどうかは別にして、少なくとも作業的な部分は勉強することで大いに改善されます。身近な京都府立高校入試を例にとっても、大問1の計算問題だけで15点近くの配点があり、その後の部分にもごく基本的な問題があるので、作業の部分ができるだけで20点は取ることができます。そして20点取ればおよそ府立高校に合格することができます。

数学は暗記科目か否かという問いもこの観点から整理できます。センスの部分は暗記ではどうしようもないでしょうが、作業的な部分は暗記で対応できそうです。しかし暗記で対応するといっても数字や式を丸暗記するのは馬鹿げています。数学は暗記科目だと主張する人の真意は、手を動かさずに何時間も考えるより答えをさっさと見て作業の練習をしたほうがよいということです。自分の忘れていたルール、思いつかなかった解法を確認して、作業の練習に励めということです。例えば三角比で言うと、三角形で2つの辺とその間の角がわかっているなら、残りの辺の長さを求めたければ余弦定理、面積を求めたければ \sin を活用するといった解法を前提にして初めて作業的な部分に入ることができます。

作業的な部分そのものは根気強く練習するのみです。かず3～4年クラスの『ウォーリーをさがせ』や迷路はルールに従って粘り強く取り組めば必ず完成するので、数学的な作業を完遂する練習になっていると思っております。

『中学数学 A』

担当 福西亮馬

毎週、学校の進度に沿って、最近の復習をしています。問題集のページにして、だいたい6～10ページほどを、いつも集中して取り組んでくれています。このクラスには二人の生徒がいますが、二人とも課題に忠実であり、気を抜かないところが立派だと思います。また自分の苦手な部分があれば、自己申告して、その問題を詰めることを進んで欲してくれます。その分、着実に力がついているように思われます。勉強は、なかなか自分の思い通りに行かないものの代表格ですが、それに対して、あれこれ自分の外側に理由を見出そうとせず、自分が変われば一番早いのだという前向きな意識が見られます。素朴で真っ直ぐな姿勢だと思います。その状態を維持していけば、今ある宝物をより磨いていくような、きっと素晴らしいことになるでしょう。

秋学期は、1年生は「一次方程式」を、2年生は「1次関数・グラフ」をしました。このあたりは、むしろ得意になりやすい単元です。とはいえ、応用問題ではいくらかでも難しいものが考えられるので、それに出会うと、萎縮してしまうことがあるかもしれません。けれども、基本はできています。萎縮して基本を落とすと勿体無いので、基本から先にして、その後で「これができるのなら、あれもできるのではないか?」と思って、チャレンジしてください。

1年生。始まりの年であり、そこからは無限の可能性の道が伸びているように見えます。しかし、実際に1人の人間が1日に行えることは限られており、従って自分の望む結果が短期間のうちに叶えられることはほぼありません。英語の学習も同様、自分がいかに限られたことしかできないかを認識する点が重要です。しかもこの「認識」ですが、「分かっちゃいるけど手が動かない」という段階で終るのではなく、限られたことしかできないのならば毎日少しずつ学習するという実践の段階まで引き上げて初めて意味があります（私自身、これが「言うは易し行うは難し」であることを日々痛感しておりますが・・・）。

具体的な学習方針ですが、演習中心だった去年とは大きく変更し、日々の授業は学校の教科書を徹底して正しく読むという点に重心を置いています。中学も高校も共に教科書本文の音読を講師と生徒と一緒にやって行きます。これは本文を日本語に翻訳して終わるのではなく原文の英語のリズムと共に理解することで、英語を正確に読むという行為を学ぶことを目的としています。まずは日本語に訳さずに音読、次に一文ずつ読みながら日本語に訳し、そして最後に文全体を音読するというのが、授業全体の流れです（なお、高校クラスでは英文の構造を身体で理解してもらうために本文の筆写も同時に行っています）。

特に注意しているのが、it や this といった指示語が文中でどういう働きをしているのかを生徒さんご自身に理解してもらうという作業です。この作業は時間がかかりますし、会話中心で文章も短いため指示語の示す内容が分かりやすい中学生の教科書でやる必要があるのかと疑問に思われる方々も少なくないかと思われます。しかし、日常生活のことを考えればこの訓練の重要性はやはり重要だと思われます。私たちは、毎日の日本語での会話で「これ」や「あれ」といった指示語を半ば無意識に使っていますが、たまにそれらが何を指しているのかが分からなかったり、話者同士の間で誤解が生じたりする結果、コミュニケーションが混乱してしまうことがあると思います。日本語の簡単な会話でさえ、そうした誤解が発生するので、多くの生徒さんにとって不慣れな言語である英語で起こらないわけがありません。

教科書の文章を一文一文、丁寧に声に出して紙に書いて日本語で理解してリズムを英語で身につける。こうした作業に時間をかけられるのは受験勉強まで比較的余裕がある1年生の特権です。2年生後半以降になると、受験対策に多くの時間を割かねばならない以上、以上のような学習方法だけではやっていけないのも事実ですが、教室での勉強で大事なものは、「自分が何ができないかを理解すること」です。もし、3年生であっても文章の意味が分からないのであれば、いつでもこの学習方法に戻ってくれば良いのです。

春学期に引き続いて、それぞれのクラスで受講生にマッチするような内容を探っています。

中学英語1～2年クラスでは「基礎英語2」を共通の活動としています。中学1年生にこれは難しいだろうかと案じる節もございましたが、このクラスの受講生は意外にあっさりと適応してくれました。それならばと学校で習っているかいないかに関わらず、様々な表現を紹介しています。後半の時間はそれぞれの学年で習う内容を抜かりなくするようにも心がけています。

中学英語3年クラスの受講生とは3年という長い付き合いになります。誰がどのような興味を持っているかなどもかなり把握しているので、それに応じた説明の仕方をしています。continue という単語の意味がわからなかったとしたら、アニメ好きの生徒には to be continued の continue だと説明します。きつとどこかでその表現を目にしたことがあるでしょうから。

高校英語2～3年クラスは同じ高校の同じ学年の受講生なので、密着した定期テスト対策をすることができます。学校で配布されたプリントを借りて、そこから順番などを変えて練習問題を出題したりしています。

英語文法クラスではついに一通りの文法を学習し終わりました。その都度ごとに思いつく素朴な疑問にも可能な範囲で答えてきました。こうしたことができるのが、参考書で独学するのと比べた時に、クラスで学ぶことの利点でしょう。

英語講読（カズオ・イシグロ）クラスでは内容を正確に理解することは当然の前提として、現代の我々はどう考えるのかという話題にしばしば及びます。作中ではヨーロッパ的な名誉がアメリカ的な自己利益を凌駕しているけれども、現代では後者のほうが圧倒的に支配的に感じられるといった話です。

『ユークリッド幾何』

担当 福西亮馬

このクラスは中学3年生のR君とマンツーマンです。今学期は、R君の方から進んで「この前にこの問題が解けなかったので、今日はこれを解けるようになりたいです」と提案してくれています。そのような時は、R君の持って来た問題を一緒に見ることをしています。こうした提案を自分からすることは、慣れれば何でもないことかもしれませんが、精神力のいることだと思います。幾何でも、点について、その名前をAやBと定義とすることは、一見当たり前のようですが、最初の慣れないうちは、なかなかできないものです。それをR君はできるようになってきたのだと感じました。

この間も話をしていた時に、R君が、「他の教科ではそれほどは思わないのですが、数学だけは、解けないと自分が負けた気がして、すごく悔しいです」と言っていました。私は、「ああ、それだったんだ。それが、『だから、私は数学をするのです』という、R君の証明なんだ」と改めて知りました。そして、人が純粋に応援できる何かを、R君は純粋に胸に持っているのだと感じ入りました。

ここからは私個人の記憶になりますが、幼稚園の頃に、朝、園長先生に抱えられながら、手を広げて飛行機になりきらないと部屋に赴こうとしなかった彼も、卒園式に号泣していた彼も、はっきりと、今の彼と同一人物なのだと知りました。その彼の十代の時の走りや、応援せずにはいられないと思いました。

一方、ユークリッド『原論』は、前学期に引き続き、第3巻を見てきました。最後の山場は定理35～37の「方べきの定理」です。その36までをこのあいだ証明し、残すところはあと1つとなりました。この稿がお手元に届く頃にはきっとそれも達成しているかと思います。マラソンランナーに対して最後にタオルをかけるシーンではないですが、R君には「よく頑張った」と改めて、その時にはエールを送りたいと思います。

『山の学校ゼミ（数学）』

担当 福西亮馬

去年の4月から『虚数の情緒』（吉田武著、東海大学出版会）を読み始めて、第Ⅱ部の7章「虚数の誕生」まで進みました。約1000ページの大著のうち、500ページ以上をすでに読み進んだこととなります。第Ⅱ部が終わると、ページの的にも内容的にも一つの頂に立ったこととなります。この稿が届く頃には、おそらく第Ⅱ部が終了していることでしょう。

自然数、整数、有理数、そして有理数を解として持つ1次関数、複素数を解として持つ2次関数へと、数に対する人の認識の進化図を順番にたどっていき、今ようやく「虚数」が表舞台に立ったところです。以前の山びこ通信の稿でも、オイラーの公式を一つの目標として、それまでの道程を一里塚を築くように見て行きましょと案内しましたが、ようやくその目標地が視認できる範囲までやってきて、「ああ、あそこだ」となっているところです。

ところで、数の歴史が虚数の認識に至るまでには、特に近代に入って、ガウスやその前のニュートン、デカルト、またガウスの後にも数々の天才を必要としました。いわば「これぞ先人の踏み固めてくれた道」です。それを、その道における一般人である私たちは、他に仕事を持ちながら、そして自己の最大の関心事に引きつけながら、それぞれ確認作業をしてきました。数学については一般人でも、というところが、特に重要だと思います。『虚数の情緒』のテーマでもある「全方位」という裾野の開拓を自ら実践していることになるからです。

数学の道はそれぞれにあります。天才は天才として、私たちは私たちとして、堂々と大手を振って、自らの中に拓けていく道をたどろうではありませんか。

『ロボット工作』

担当 福西 亮馬

前学期から引き続き、3年生はレスキュー・クローラーを無線モジュールで動かすことを、1年生はミュウロボで工作しています。どちらも本体は、3つのモーター（足回りの左右に2つ、アームに1つ）を駆動するロボット・カーです。

1年生は足回りが十分に実験できたので、今度はアームの仕様を決めました。スタート地点でピンポン玉を掬い取り、ゴールへ運ぶということを考えています。アーム部分に箱や筒を取り付け、自分なりのアイデアを形にしていきました。それが一応できたので、次に有線で動かすリモコン・スイッチを作っています。最近になってはんだごてを使い始めました。

3年生の方は、途中で故障にみまわれ、ただいまトラブル・シューティング中です。モーターの駆動には1個につき2本の信号線が必要で、今の仕様だと計6本必要になります。あいにく無線モジュールにはそのためのデジタル・ポートが4つしかありません。そこで、使っていないアナログ・ポートが4つあったので、それを2つデジタルに変換して使うことを考えました。しかしこれがなかなかの曲者で、そのまま使おうとしたところ、どうにも受信機の方で故障が頻繁に起こってしまいました。そこで、どうやらモーター用の電源から信号用の電源を（降圧して）取っていたことが原因で、絶縁しなければならなかったのだらうと推測し、フォト・カプラという部品を使ってその点を改良中です。

ところで今、おもちゃコーナーを見ると、電子部品の組み込まれたものに、i-phone・ipadやandroidのアプリと連動させて、wi-fiで無線操作できる（しかもカメラ付きの！）ロボットが比較的安価に出されています。実はそのおもちゃを買ってくれば、そっくりそのまま、今3年生がしようとしていることが実現できてしまいます（笑）。（設定するだけでした。ただし通信距離が5mほどでやや不満があることも確認しました）。そこでクラスではあえて自作の道をたどっています。それにしてもwi-fi技術。おもちゃにも使われるようになり、隔世の感がありますね。

『山の学校ゼミ（社会）』

担当 中島 啓勝

政治・経済・文化など、多岐にわたるグローバルなニュースの解説と、歴史や思想を中心とした課題図書2の講読、この二本立てで行っているこの授業も開講から早三年が過ぎようとしています。これまで継続して受講して下さっている三名の方々とはかなりの議論を重ねてきましたので、新しいニュースを見る際にも「ああ、これは以前のあの話題と地続きの問題だな」という共通理解が生まれやすくなりました。また、ある地域の経済問題を扱っても、「じゃあこれは他の地域にはどんな影響を与える可能性があるだろう？」「外国の政策担当者たちならきっこう考えるんじゃないか」など、比較の視点を持ちながらニュースを分析するという習慣を持って頂けていることを実感しています。

例えば、混迷深まるシリア・イラク情勢について取り扱うことが最近多かったのですが、以前から一緒に「アラブの春」の動向を定点観測的にチェックしてきたことや、または課題図書の講読でアフガニスタンの歴史について時間をかけて学んできたことが理解の大きな助けとなりました。シリアとイラクの現在だけ見ても何が起きているかわからない。この地域での出来事をもっと大きな地理区分の中に置いてみる、歴史を遡ってその連続性を確認する、こうした考え方がごく当たり前のこととして共有されるようになったことは、この授業の一つの成果ではないかと自負しております。

しかし、メンバーが固定されたまま長い時間が過ぎるばかりだとマンネリに陥りやすいこともまた事実。そういう訳で、今年から新規の受講者の方に加わって頂けたのは我々にとっても非常に大きな変化でした。これまでの雰囲気にもまた新たな風が吹き込みつつ、和気あいあいと授業を行っています。この紹介文で繰り返し書かせて頂いていますが、講師である私も含めて、異なる背景や関心を持つ社会人が五名も毎週同じ所に集まって、今まで必ずしも詳しくなかった海外事情について学び話し合う経験はなかなか得がたいものですし、それも気軽に楽しく続けられているということは、ひとえに受講されている皆さんのおかげです。若輩者の私がむしろ皆さんの胸を借りて話題提供者としての腕を磨かせて頂いているのだと感じることも多く、もっと精進しなければならないと反省するばかりです。

今後の授業内容ですが、ニュースに関しては、アメリカで静かに、しかし確実に始まった次期大統領選への動きを折に触れて紹介することが多くなると思われます。ポスト・オバマの時代はどうか、注目です。課題図書は前学期の終わりから『イスラーム銀行 金融と国際経済』（小杉泰・長岡慎介著、山川出版社）を読んでおります。今後も受講者の方々と相談しながら、ジャンルの垣根なく興味の赴くままに色々な本を選んでいこうと思っています。皆様のご参加をお待ちしております。

『山の学校ゼミ（経済）』 担当 百木 漠

大人向けに経済学の基礎を教えているこのクラスでは、今期からもうひとり参加者が増えて受講者が2名になりました。おふたりとも中島先生担当の山の学校ゼミ（社会）の受講者でもあります。今期は時間帯を水曜日の14時から移して、中島先生のクラスと連続での授業というかたちにさせてもらいました。受講されているおふたりは、一日に3時間近く（以上）の授業時間になってしまうので大変だと思うのですが、それでもおふたりとも熱心に授業に参加してくださっているのありがたい限りです。

授業内容としては、前期と同じく、前半に経済時事ニュースの解説、後半にアダム・スミス『国富論』の輪読をおこなっています。前半の経済時事ニュース解説では、やはり日本経済やアベノミクスの動向が話題になることが多いです。去年は好調好調と言われていたアベノミクスも、今年4月に消費税が8%になってからは徐々に逆風が吹き始めているようです。当初の目標どおり、デフレは脱却しつつあるものの、今度はいろんなものの値段が上がって、実質賃金がマイナスになっていることが問題になっています。額面上の賃金はアップしていても、物価上昇を考慮した実質収入は11ヶ月連続でマイナスが続いているのです。そうすると多くの家計では財布のヒモを締め始めるので、自然と消費支出もマイナスになります（9月時点で消費支出は5ヶ月連続の減少）。一部の企業製造業は業績好調なようですが、その他のサービス業や中小企業では昨年よりも業績が落ち込んでいるところのほうが多く、7-9月期にも消費・投資の数字が回復しないことが問題になっています。本当にアベノミクスの狙いは正しかったのかどうかの議論を含めてまで、今後の経済政策の方向性が問われることになりそうです。

後半の『国富論』の輪読は、10月の前半で第10章まで進みました。『国富論』といえば「神の見えざる手」が有名ですが、実際には『国富論』のなかに出てくる表現では「神の」という単語はついていません。単に「見えざる手 invisible hand」という表現がされています。しかも『国富論』のなかではその表現が使われているのは、わずか2箇所だけです。スミスは必ずしも「市場に任せればすべてうまくいく」（自由放任主義）ということだけを主張したのではないですし、「見えざる手」の万能性を主張していたわけでもありません。むしろ、当時の世界経済の情勢に細かく目を向けながら、自然本性にもとづいた経済-社会のあり方を広く構想していたというほうが正しいでしょう。古典を読むのはときに面倒な作業でもありますが、長い目で見れば確実にものを考える力を養うことができます。地道ながら、少しずつ『国富論』を読み進めていければと考えています。

『イタリア語講読』 担当 柱本 元彦

前回に引きつづき三名でダンテの『新生』を読んでいます。かなり慣れてはきましたが、相変わらずのゆっくりペースで進め、三分の二ほど読み終わったところです。今年の二月頃にはじめましたから、一年間で終わるのか終わらないのか、ともかくまだ続きます。ですがクラス担当者としては、そろそろ次の作品の選択が気になってきました。一度＜古典＞に踏み出せばなかなか元には戻れない……。けれどこれはこれでいいのかもしれない。この世に生きているあいだに原文で読んでおきたい書物があります。どの本かはもちろん人によって違いますが、いずれにせよ＜古典＞からではないでしょうか。たしかに読むに難しく、会話に應用できるわけでもありません。けれども死ぬまでに読みたいという思いには、何の役に立つのかという問いは無用でしょう。何か月も前ですが山下先生に質問したことがありました。＜処刑の直前までソクラテ

スは笛の稽古をしていた。今更どうして何のためにと尋ねる弟子に、生きているあいだにこの曲を覚えたいから、とソクラテスは答えた」というエピソードについて、いったいどこに書かれているのでしょうか、と。いろいろ調べてくださって、どうやら誰かが（おそらくシオランが）捏造したものらしいと分かりました。それにしてもまさにソクラテスに相応しい素敵なエピソードではないでしょうか。値千金の捏造です……。そういうわけで、どこまで続けられるか分かりませんが、〈古典〉にとどまろうと担当者は勝手に決心しつつあるところです。

『フランス語講読』（A・B） 担当 渡辺 洋平

フランス語講読の授業は、春学期から引き続き、A、B ふたつのクラスでデカルトの『方法序説』を読み進めています。Aのクラスの方は、夏期講習期間中も開講したこともあり、ずいぶんと進みました。『方法序説』全6部のうち、すでに第4部の後半に入っています。この第4部は、絶対的な真理を見つけ出すために、ほんの少しでも疑いを差し挟むことのできるものはひとまず誤りとみなして放棄する、といういわゆる方法的懐疑が語られます。その結果として見出されるのが、たとえすべてが疑わしくとも、疑っている自分自身は疑いもなく存在しているのだという真理、つまり「我思う、故に我あり (Je pense, donc je suis)」という真理です。デカルトはここから、魂や神の存在の証明に向かいます。このように、内容的にもやや抽象的、形而上学的になる第4部は『方法序説』の山場とも言うべき箇所です。そのために文章もやや難解になりますが、ひとつひとつ解きほぐしながら読み進めています。また、『方法序説』の内容を当時の学者向けにより詳しく書いた書物である『省察』も、簡単にはありませんが、適宜合わせて読むことにより、デカルトの考えをより深く探りながら、何を問題としているのかを考えています。

Bのクラスもそろそろ第3部に入るところです。これまでの人生を振り返る段階が終わり、少しずつデカルト自身の思想が語られ始めます。特に第2部では、真理へ至るための4つの規則が語られます。すなわち、疑いえないものだけを判断に取り入れるという明証性の規則、問題を可能な限り部分に分割するという分析の規則、分析されたものを単純なものから複雑なものへと組み合わせていくという総合の規則、最後に分析・総合において数え落としをしてはならないという枚举の規則です。これらの規則は、現代でも学問的な思考法の基礎ともいうべきものであり、この意味において、私たちはいまでもデカルト主義者であるわけです。このほかにも例えば、今でも中学校で教わるx-y座標も、その考え方の基礎はデカルトが考案したものです（そのためフランスでは今でもx-y座標のことを「デカルト座標」と呼んでいます）。このようにそれとは知らずとも私たちはデカルトの影響をいろいろなところで受けているのです。

しかしその一方でデカルトは多くの問題も後世に残しました。その最たるものはやはりいわゆる心身問題、心と身体はどのようにつながっているのかという問題でしょう。この問題はデカルト以降、多くの哲学者たちによって論じられてきましたが、いまでも議論はつきず、脳科学や神経科学においてもかたちを変えて問題になっています。『方法序説』においてこの問題が語られるのはまだ先の箇所ですが、好むと好まざるとにかかわらず、デカルトの影響はとて大きなものであり、その影響の大きさも考え合わせながら少しずつ読み進めていきたいと思います。

『ロシア語講読』 担当 山下大吾

前身である入門コースから前学期まで、Tさんお一人と差向いで行われていたこのロシア語クラスに、今学期からNさんが新たに加わりました。トリオでの講読となり、それぞれ自分一人では中々見いだせない新たな読みや解釈の生み出される機会が増え、以前より増して活発な時間が営まれています。以下に述べる作品は間もなく読了の予定で、次はプーシキンのロシア南部流刑時代の代表作である『ジプシー』に取り組みます。

現在講読のテキストはプーシキンの劇詩『モーツァルトとサリエリ』です。モーツァルトの死を巡って当時噂されたサリエリによる毒殺説をテーマに、プーシキンの詩的天分がいかに発揮された作品で、ミロシュ・フォルマン監督の映画『アマデウス』の原作の一つとしても知られています。

主人公はシンプルな表題そのまま、プーシキン自身の似姿である天衣無縫の天才モーツァルトと、彼に嫉妬する職人気質、努力の人サリエリ。今ではロシア語の熟語として定着してしまった「ハーモニーを代数学でチェックする」という冷徹な態度で音楽を分析するサリエリも、音楽の持つ深み、勢い、調和を、軽々とこの上なく見事に再現するモーツァルトの才能を前にして、彼を「神」と認めざるを得ません。それに対してモーツァルトは、茶目っ気たっぷりに、しかもサリエリの言葉と同じジャンプという厳格な韻律に則った調子でこう答えます。「でも僕の神ってやつは腹がへっちゃってね」。

既出の単語や表現、モチーフが効果的に繰り返されることによって、簡素に、贅言を要せずして行間や紙背から無理なく複層的にメッセージが伝わり、それを読み解く楽しみはまた格別です。軽く口語的な響きのモーツァルトと、重々しく文語的なサリエリという文体の対立は両者の性格をより一層際立たせていますが、訳読する立場としては、口語特有の簡略表現などが少ないサリエリの方が往々にして理解しやすいのは何とも皮肉なものです。文法的読解ほど、先に引いたサリエリのモットーである「ハーモニー」の態度が求められるのだと改めて気づかされます。結局我々外国語を読み解く者は、どこまでもサリエリと同じ立場を堅持すべきなのでしょう。その姿をモーツァルト＝プーシキンは、微笑ましく見つめているのかも知れません。

『ラテン語初級文法』 『ラテン語初級講読』(A・B・C) 担当 山下大吾

初級文法クラスでは、前学期に学んだ範囲を復習する形で新たな項目に取り組んでおります。既に接続法や能相欠如動詞を終え、今学期末の課程修了に向けて順調に進んでいます。受講生の A さんも、課が進むにつれて、大学で学んでいるドイツ語文法との関連性が増していくことに喜んでおられるようです。接続法もいずれ出てきますので、是非参考にしてください。課程の最後には『ガリア戦記』冒頭の講読を予定しています。

講読クラスは前学期と同様、A、C クラスではキケロー、B クラスではホラーティウスを読み進めております。なお C クラスでは『友情について』に取り組んでおりますが、受講生のご都合で今学期はまだ開講されておられません。前学期終了時点で、全体のおよそ 3 分の 1 に当たる 31 節まで進んでおります。

A クラスでは去年の 5 月から読み進めてきた『老年について』の読了がいよいよ間近となりました。受講生の H さん、A さんの不断のご努力、熱意に心から拍手を送りたく存じます。プラトーンやクセノポーンなどギリシア人の作品を引用し、同郷人であるローマの先達の言動をも逐一挙げ、魂の不死に対する確信を二人の若人に述べ伝える大カトーの言葉から、キケローその人の全力を傾ける姿がまざまざと浮かびあがります。プラトーンの引用はかつて『スキピオの夢』でわれわれ三人が目にしたもの。その折読んだ「常に自ら動くものこそ永遠である」の言葉が、その動詞に現れている例外的用法と共に胸によみがえりました。次回は文学を讃える言葉に満ちた弁論『アルキアース弁護』に取り組む予定です。

B クラスでは今学期の初めにフロルス宛て書簡を読み終え、現在は『書簡詩』の 1 巻に取り組んでおります。受講生は引き続き C さん、M さんのお二方です。今回も Non eadem est aetas, non mens 「年が違えば心も変わる」(1.1.4.) など、「三つ子の魂百まで」と対をなす名句が早速出てきました。またホラーティウスにとっては容易なのかもしれませんが、同格あるいは同一表現のみを連ねて構成された一行 (Viribus, ingenio, specie, virtute, loco, re 「力量、才能、見栄え、徳、地位、財産の点で」2.2.203. 他にも 2.2.173; 1.1.38; 『詩論』121) など、意味を取る前に、何よりラテン語の形式の美しさにつられて思わず口ずさみたくなるような詩行に接する楽しみも、彼の作品の有する魅力の一つと言えるでしょうか。硬く真剣なテーマの中に、心の和むユーモアを巧みに散りばめる。そのような彼の詩行を読み解く豊かな時間が毎週末展開されております。

『ラテン語初級』『ラテン語中級』『ラテン語中級講読』 担当 広川直幸

ラテン語初級では受講生四名と Hans H. Ørberg, *Lingua Latina I: Familia Romana* を用いてラテン語の初歩を学んでいる。文法事項をゆっくり導入する教科書なので、現在 19 課まで進みようやく未完了過去があらわれたところである。Ørberg の教科書の良いところは文法の解説に偏らず、文脈の中で豊富な表現（語彙）を学ばせる点にあるが、やはり文法は一度全体を俯瞰しておいたほうがよい。しばらくしたら、この授業を補完する形で文法の講習会を行うつもりである。

ラテン語中級では受講生二名と Hans H. Ørberg, *Lingua Latina II: Roma aeterna* を用いて講読と作文を行っている。現在 53 課を読んでいる。*Lingua Latina* は 56 課で終わりなので、やっとゴールが見えてきた。Ørberg の *Lingua Latina* を教科書にする授業は日本でも少しずつ増えてきているようであるが、二巻目はかなりレベルが高いため最後までやり終えたという話は聞いたことがない。これを終えれば無理なく原典講読に進むことができる。あと少しである。頑張ろう。

ラテン語中級講読では受講生一名と Peter Dronke, *Nine Medieval Latin Plays* をテキストに中世ラテン語劇を読んでいる。テキストに収録されている順番にはこだわらずに *Sponsus*, *Officium stelle*, *Ludus de passione* を順番に読み終え、今はビンゲンのヒルデガルトの *Ordo Virtutum* (美德たちの劇) を読んでいる。今までに読んだ劇と比べると表現がやや難解ではあるが、Sequentia による録音の CD が容易に入手できるという楽しみもある。*Ordo Virtutum* を読み終えたら、この授業では久しぶりに、古典期の韻文を読む予定である。

『ギリシャ語初級』『ギリシャ語初級講読』(A・B・C) 『ギリシャ語中級講読』

担当 広川直幸

今学期が始まってから急遽開講が決まったギリシャ語初級では、受講生一名と水谷智洋『古典ギリシア語初歩』(岩波書店)を教科書にして、ゆっくりとしたペースで古典ギリシャ語の基礎を学んでいる。この授業(木曜日 18:40 から 20:00 まで)は来学期から教科書を Peckett & Munday, *Thrasymachus* に変更して再スタートする予定である。それに伴い受講生を募集するので、古典ギリシャ語に興味のある方はこの機会をお見逃しなく。

ギリシャ語初級講読 A では受講生一名とソポクレスの『オイディプース王』を読んでいる。現在 1300 行近くまで来ているので、今学期終了とほぼ同じ時期に読了できそうである。主としているテキストは Lloyd-Jones と Wilson 校訂の OCT である。註釈書としては OCT のコンパニオンである *Sophoclea* と Jebb と Dawe をメインに用いている。校訂に関して執拗に検討しながら読んできたので、現行の OCT 版がどのようなものであるかは大体理解できた。分かる人には分かると思うので敢えてそれをここに書くことはしない。『オイディプース王』の次に何を読むのかはまだ決めていないが、一言一句も忽せにせず綿密にテキストを検討することに興味がある人であれば参加を歓迎する。

ギリシャ語初級講読 B では受講生二名とプラトンの『パイドーン』を読んでいる。テキストと註釈は Burnet と Rowe を併用している。一回の授業(2 コマ分)で一度に 3 ページ程度読み進めている。現在 90c まで進んだので半分以上読み終えた。プラトンのギリシャ語は古典期ギリシャ語散文の最高峰であると個人的には思うものの、『パイドーン』はやはり難しく、議論の前提を共有できないもどかしさを感じることが多い。講読と同時に地道に続けている North & Hillard, *Greek Prose Composition* を用いた作文は Exercise 87 まで進んだ。

ギリシャ語初級講読 C は今学期は開講していないが、来学期は『新約』の「ルカによる福音書」の講読を 9 章 12 節から再開する予定である。

ギリシャ語中級講読は受講生一名と『イーリアス』第 22 歌を一回に 30 行程度のペースで読んでいる。現在 363 行まで進んだ。テキストは M. L. West 校訂のトイプナー版を、註釈はケンブリッジの黄色と緑のシリーズの I. J. F. de Jong, *Homer: Iliad Book XXII* を用いている。West の校訂本は一般的な辞書や文法書で調べても分からない読みが採用されていることがあるので、必要な場合にはなぜそのような読みが可能なのかを解説しながら進めている。第 22 歌の次は第 24 歌を読む予定である。

将棋道場には相変わらず毎回、たくさんの子供たちに参加してもらっています。ありがたい限りです。世間的にも最近はまだ将棋の人气が徐々に再燃しているらしく、老若男女を問わず、将棋人口が増えつつあるそうです。インターネットやスマートフォンなどでオンライン将棋を楽しんだり、プロ棋士の対局を生中継したりという新しい将棋の楽しみ方が増えてきたことが影響していると言われています。プロ棋士とコンピューターソフトが対戦して話題になった「電王戦」も人気再燃の大きなきっかけになったようです。

8月の将棋道場は夏休み特別企画ということで、大人（保護者）の方も参加可能なかたちにして日曜日に開催しました。おかげさまで子供の参加者とはほぼ同数の大人の方に参加をいただき、いつもとは少し違った雰囲気でも盛り上がるこ



できました。子供たちもいつもは友達どうしではしゃいだり騒いだりしているのですが、大人の方がたくさんいると、自然といつもよりおとなしくなり、結果としてそれぞれの対局によく集中してくれ

ていたように思います。歳の差をこえた子供と大人の対局があったり、大人どうしの対局があったりと、バラエティに富んだ組み合わせでの対戦が見られて良い雰囲気でした。

自分の周囲にも、大人になって久しく将棋を指していないが、たまには誰かと対戦してみたい、将棋のコツを習ってみたい、という人は少なからずいます。確かに多くの人にはなかなかそういう機会がないと思うのですが、たまには将棋道場でこのようにして、子供と大人が一緒になって将棋盤を挟む機会を作るのもいいものだなと思いました。以前にも書きましたが、将棋

というゲームは年齢や性別などに関係なく楽しむことができ、誰でも少し勉強・練習すればライバルに勝つことができるのが良いところです。

9月の将棋道場は半年に一回のトーナメント大会でした。今回は16名の子供が参加してくれ、トーナメント表がきれいに埋まって、大変に盛り上がりました。優勝したのはKaくん。将棋道場3級で一番上の立場でしたが、その実力を持っていることをしっかり証明してくれました。Kaくんはいつも優勝候補でありながら、トーナメント大会ではうっかりしたミスで敗退してしまうことが多かったのですが、今回は大きなミスもなく順当に勝ち上がっての優勝だったと思います。準優勝はMiくん。Miくんは現在8級で、Kaくんとは反対に一番下の立場なのですが、数カ月前よりもぐんと強くなって帰ってきたのでびっくりしました。お父さんが買って来た将棋の本を読んで、あっという間にお父さんよりも強くなってしまったとのこと。もはや5級か6級くらいの実力はあるのではないのでしょうか。数ヶ月前は初心者クラスだったのに、今回はあれよあれよと決勝戦まで進んで、見事に準優勝でした。今後もさらに期待ができそうです。3位のSoくん、4位のTaくんも、最近確実に力を伸ばしていて（現在ともに6級）、今後の将棋道場を支えてくれそうです。

将棋道場では級差によって駒落ちのハンディキャップを設けているので、何級の子であっても、きちんと勝ち上がれば上位入賞の可能性があります。これからさらにみんなの実力が伸びるように、将棋を指す楽しさを伝えていければと思っています。

——本誌を手にとり下された方へ

山の学校は、小学生から大人を対象とした新しい学びの場です。“Disce libens. (楽しく学べ)”がモットーです。中高生のための徹底した少人数指導のクラス、社会人のための語学クラスも充実。子どもは大人のように真剣に、大人は子どものように童心に戻って学びの時を過ごします。

「山びこ通信」は、その様子をお伝えすべく、学期毎に年三回発行しているものです（春学期は6月、秋学期は11月、冬学期は2月）。ホームページでも、クラスの様子やイベント（毎月開催・無料）の情報などを発信しています。学ぶことが楽しくて仕方がない！もし、そうした気持ちを持て本誌を通し、少しでも皆様と共有することができたとすれば、望外の喜びです。

お申し込み・お問い合わせはこちらまで

TEL: 075-781-3215

FAX: 075-781-6073

E-mail: taro@kitashirakawa.jp

http://www.kitashirakawa.jp/yama-no-gakko

